

明治の東京を描いた案内書

Characteristics of Guidebooks to Tokyo in the Meiji period

高 槻 幸 枝 Yukie TAKATSUKI

観光案内書は、訪れる価値のある場所を選定し、文章、絵・写真、地図などを用いて読者に紹介する。この機能は、ある場所が何らかの価値を見出され（もしくは付加され）名所として一般に認識されてゆく過程にも関わっているため、案内書は、名所や観光地という「場所」のあり方を検討するための有用な材料になりうる。案内書の分析には、発行状況や、取り上げられている場所の特徴などを時期ごとにおさえるマクロな分析方法と、各書籍の内容を詳細に検討するミクロな分析方法がありうるが、前者の研究はあまり多くない。

本稿ではまずマクロな視点から、明治期の東京を紹介する案内書の書誌的なデータを収集し整理した。明治期の社会の変化の中で、多くの新名所が造られてゆく過程に注目することから、近代における場所認識の変化を検討できると考えられる。

データを収集した案内書は計177点で、分類（後述）、発行年、表題、編著者、版元、見物コース、地図の有無および形式、挿絵・写真の有無、体裁、ページ数、改版、価格、読者対象について調べ、リストを作成した。

分類とは、次のA・Bの組み合わせによって案内書の性格を示すものである。

A内容に着目した分類：a. データブック型／b. 読み物型／c. 観光案内型／d. ビジュアル型／e. 上記の混合型

B構成に着目した分類：a. 場所別／b. 事柄別／c. コース別／d. 上記の混合型

この分析から、①案内書の出版点数には時間的な波があり、博覧会開催や行政界変更などが増加のきっかけとなっていること、②見物場所として宮城や官庁が重要視されていたこと、③地図は江戸図の影響を残していること、④明治30年代から写真が挿絵に代わって使用され始め、40年代には主流になることが分かった。

さらに、ミクロな視点から分析するために、『東京遊覧案内』（東京市：1907）、『東京案内』（報知新聞社：1906）、『東京遊行記』（大町桂月：1907）の3冊の内容を比較した。

まず、掲載範囲では、鉄道を利用した日帰り圏

を想定した『東京遊行記』は群馬、静岡までを掲載し、『東京案内』はほぼ東京市内の15区のみ、その中間が『東京遊覧案内』であるというように、範囲にかなり大小がみられた。

次に、掲載されている場所の新旧や種別に着目して、それぞれの案内書の特徴を考察し、さらに、いずれもが取り上げる江戸と東京の第一の名所である日本橋と宮城の描写について、比較をおこなった。

『東京遊覧案内』は区部を中心に紹介し、明治より前から存在する名所と、明治期に形成された新名所とでは、新名所をやや多く取り上げている。旧名所が多いのは浅草区、新名所が多いのは麹町区であった。日本橋、宮城の描写は、故事来歴が中心であり、雰囲気や著者が受けた印象についてはあまり触れられていない。

『東京案内』は、読み物ふうの記事、たとえば「一週間の東京」などで麹町区を中心とした新名所を紹介し、伝統的な自然の景物を番附（「四季の遊覧」）で、寺社を中心とした旧名所を「町名索引」で取り上げている。同書中では、浅草区は凌雲閣など新名所が主に紹介されている。読み物の表現はやや感情的で大袈裟、「町名索引」の解説文は故事来歴が中心である。

『東京遊行記』は主に東京市の郡部や埼玉、千葉、神奈川などを取り上げているが、区部の新名所も一通り紹介されている。文章は紀行文風で、ところどころに著者の感想や意見が述べられており、東京の空気の悪さや、日本橋が有名なわりには粗末であることなど、名所に対して批判的な記述も散見される。

以上、明治期の案内書の出版状況および、明治末期の案内書にみられる場所に対する認識の一端を明らかにすることができた。

人間文化研究科 発達社会科学専攻 地理環境学コース